国分のタバコ今昔

「鉄砲」といえば「種子島」、「タバコ」といえば「国分」というくらい、国分のタバコは有名なものです。例えば、浄瑠璃の「伊賀越道中双六」の台詞に「貴方のお口に合ふのなら服部か国分か…。」つまり、「あの方のお口に合うのなら、服部（大阪・高槻）のタバコか国分のタバコでしょう…」と言っています。

国分で最初に栽培をしたのは服部宗重（一五四九～一六二八）という人でした。慶長十一年（一六〇六）に島津義久の許しを得て、梅木で一反歩の畑で試作をしました。試行錯誤の末、良質の葉を栽培することができるようになり、宗重は、たばこ奉行に任命されました。

享保十（一七二五）年、幕府は諸藩の財政援助の方策としてタバコの栽培を奨励しはじめました。おおよそこの時期から薩摩藩内での栽培が盛んになったようで、この頃まで、タバコと言えば摂津国、今の大阪府高槻市の服部という所のタバコが有名だったようですが、だんだんと国分のタバコが有名になっていったようです。

そんな国分タバコの中でも、砂走・伊勢ヶ屋敷・車田・龍王・武元の五か所が特に有名な産地で、味や香りは群を抜いてよかったそうです。国分タバコだけ吸うと、一回吸っただけでむせてしまうほどきつく、二回・三回と続けて吸うことはできなかったといいます。ですから、商品にするときは、他の葉とブレンドしていたようです。

文化十二（一八一五）年、重富の商人が藩の許可を得て、国分タバコを江戸に売り込みました。そのときの等級は第一級から第六級まで設定され、商標名は伊勢ヶ屋敷、車田などの国分タバコの名産地名が付けられています。明治になっても、国分タバコは有名なタバコとして日本全国に広まりました。

昭和二十一年度、国分地区内のタバコ耕作面積は二百八十七ヘクタールで、平成十七年度は霧島市全体で六十ヘクタールということなので、昭和の後半からタバコの耕作が縮小されてきたことが分かります。また、品種が大きく変わっているため、全盛期の国分タバコとは種類が違うようです。

最近は、健康志向や周囲への配慮からか、タバコを吸う人が少なくなりました。禁煙を推進している世の中ですが、タバコが流行していた江戸時代はどうだったのでしょう。

江戸時代の初めに喫煙の習慣が広まりました。すると、すぐに幕府は禁令を出していて、「野蛮な西洋人の言うキセルというものを懐の中に所持して、競うように煙を吹いているような無益なことは止めるように」とか、「この二・三年、貴賤の上下に関わらず、諸病に効くといってタバコを吸っているが、かえって悶絶して死んでしまうから禁止する」そして、「江戸の城内においての喫煙は厳しく禁止する」と、いつの時代の話か分からないような禁令まで出ています。しかしながら、厳しい罰則にもかかわらず、江戸時代の人々もなかなかやめられなかったようで、江戸市中では「歩きタバコ」を取り締まる役人が一日中見回りをするといった、徹底的な対応をしています。

薩摩藩内でも、身分の高いものは、正八幡宮（鹿児島神宮）の神前で、禁煙しますと誓いを立てたり、喫煙取締りの役人もいたりして、見つかったりすると厳重に処罰されたようです。薩摩藩の初代藩主、島津家久が島津義弘にあてた書状には、参勤交代の供の者がタバコを吸ったら身分の上下に関わらず厳重に処分するのでよく申し聞かせるように達している、と書かれているようです。

江戸時代の禁煙は、前述のとおり、享保十年に幕府が栽培を奨励するまで厳しいものでした。厳しい禁令を出して罰しても、解禁されると瞬く間に大きな産業になったということですから、よっぽど日本人はタバコをやめることができなかったのでしょう。

（文責：坂）

国分のタバコ畑